

英文の読み方を考えるⅥ

—修飾関係に焦点をあてて—

① 形容詞的修飾語句

平井 正朗

I はじめに

学校文法において、修飾語と言えば、形容詞的修飾語句と副詞的修飾語句に範疇化することができる。さらに前者はNを修飾する場合とCになる場合、後者はV、形容詞、(他の)副詞を修飾する場合と文修飾になる場合に下位区分される。修飾の意味領域については、一般に修飾要素と被修飾要素の意味内容の共通集合(intersection)として捉え、XはYを「修飾する」とか「かかる」という言い方をするのが通例である。本稿では、修飾関係の誤読から生じた事例を抽出し、リーディング・スキルを考察することによって“直読直解”に資するアプローチを試みる。

II 形容詞的修飾語句

形容詞の限定用法はNを前後から修飾する言語現象であるが、後置修飾の場合は、統語構造解析エラーから誤訳が生じやすい。(以下、太字イタリックは筆者。)

- (01) A phone *without wires, so small that it fits in a pocket, containing such miracles of technology that one can call home from the back seat of a London taxi without thinking twice*, is still just a phone. (東京大, 08)

(電話線がなく、ポケットにおさまるほど小さく、ロンドンのタクシーの後部座席から深く考えることもなく家に電話をかけるほどの科学技術の奇跡を内蔵している電話は、それでもただの電話にすぎない)

(01)では without wires, so small that it fits..., containing... の sense group を A phone の 形容詞的後置修飾語句と解析する視点があり、また without wires を形容詞的修飾語句, so small

that... を being 任意削除の分詞構文として機能する副詞的修飾語句, containing... も同様、分詞構文として機能する副詞的修飾語句と解析する視点が可能であり、訳出は両義的なものになる。

(電話線がない電話は、とても小さいのでポケットにおさまり、ロンドンのタクシーの後部座席から深く考えることもなく家に電話をかけるほどの科学技術の奇跡を内蔵しているものの、それでもただの電話にすぎない)

- (02) Just how does a child go about distinguishing among dozens of speech sounds? And, equally important, how does she go about figuring out how to *make* those sounds and then assemble them into fluent melodies of syllables and words? What, if anything, does babbling have to do with all of this? Do children really produce all the sounds found in human language before learning to speak their own?

All of which brings us to the ultimate question: how do children learn language? (奈良女子大, 07)

(子供はいったいどのようにして数十個もの話し言葉の音声を聞き分けるのだろうか。そして、同様に重要なことではあるが、その子はどのようにして、それらの音声を作り出し、次にそれらを音節と語の流暢なメロディーに集約する方法を理解し始めるのだろうか。もしあるとすれば、幼児語は、このすべてと何の関係があるのだろうか。子供は自国語を話し始める前、人間の言語にあるすべての音声を本当に発声できるのか。そのようなすべてのことが「子供はどの

ようにして言語を学ぶのか」という最終的な疑問へと我々を導くのである)

関係代名詞の独立節であり, which の先行詞は前文内容「子供の音声理解と発声」である. 高校英語では取り扱わないが, 長文素材にはよく現れる形態であるから大学入試対策という観点から検証すべき項目であることを付言しておく.

- (03) I also received gifts and cards from Japanese friends. Some of them expressed similar sentiments, but there was one thing *many Japanese friends wrote that none of the Americans had.* (一橋大, 04)
(私はさらに日本人の友人から贈り物やカードを受け取った. それらの中には同じような気持ちを表したのもあったが, 多くの日本人の友人が書いたが, アメリカ人のだれも書いていないことがひとつあった)

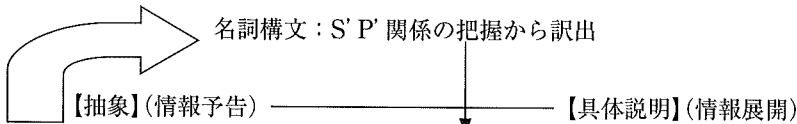
目的格関係代名詞 that, もしくは which が任意削除された関係詞節 many Japanese friends wrote が先行詞 one thing を後置修飾し, 再度, 関係詞節 that none of the Americans had が先行詞を修飾する構造の二重限定となっている. 先行詞+関係詞節①+関係詞節②の二重限定の場合, 「①の中の②の先行詞」が原義となる. なお, from Japanese friends は gifts and cards を修飾する

[A and B]← M の構造であるが, context に応じて A and [B ← M] の可能性も想定した読み方が基本である.

- (04) And *his early deep* pessimism that little could be done to improve the lot of the poor gave way to *a moderate* hope that moral restraint combined with wise laws might improve living standards, lessen inequality, raise the status of women and promote freedom for the labouring poor. (横浜国大, 07)

(彼は当初, 多くの貧しい人たちの改善のためにほとんど何もできないだろうという深い悲観主義であったが, 道徳的抑制が賢明な法律と結びついて, 生活水準を改善し, 不平等を減らし, 女性の地位を向上させ, 労働貧困者の自由を促進するかもしれないという穏便な期待へと変容していった)

M(形容詞的修飾語句)+N+同格節の構造である. 読解では, 限定詞 his や a の支配領域が pessimism, hope まででなく, that 節も含むということに着目した解析が必要である. また, 同格の名詞節の特徴となる抽象名詞 pessimism と hope の具体説明が that 節に描写されていることにも留意し, 次のような認知領域へのプロファイリングが直読直解につながる.



→ his early deep pessimism(彼が当初, 深い悲観主義であったこと)⇒ that...(どんな悲観主義?)

【抽象】(情報予告) ————— 【具体説明】(情報展開)

→ a moderate hope(穏便な期待)⇒ that...(どんな期待?)

形容詞の叙述用法は C(主格補語, もしくは目的格補語)になる言語現象であり, 視覚上捉えやすいものの文構造が複雑になると解析エラーが生じやすい.

- (05) Remarkable for any golfer, Woods's accomplishments are made *all the more*

compelling by his having achieved the peak of success in a sport previously inaccessible to African Americans. He is to golf what Arthur Ashe was to tennis — the young man who shattered the racist walls of his sport with style

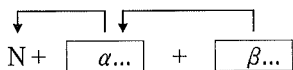
and confidence. (北九州市大, 04)

(どのゴルファーが成し遂げたとしてもすばらしい業績であるのに、ウッズはアフリカ系アメリカ人がそれまで近寄りたかったスポーツで成功の絶頂を極めたことによって否が応でも人々の注目を集めたのである。ゴルフでのタイガー＝ウッズの実績は、テニスでのアーサー＝アッシュの実績に相当する — 若いアッシュは、テニス界での人種差別の壁を風格と自信のある態度で打ち破ったのである)

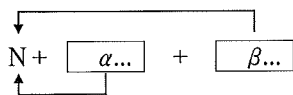
...make Woods's accomplishments all the more compelling... の受動態であるから文型は SVC ということになる。また、A is to B what[as] C is to D は構文化されているが、A=S, is=V, to B=M, 名詞節 what C is to D を C と解析し、名詞節の右方移動と見なすとわかりやすい。(05)のように構造が複雑になるとメンタル・アクセスしにくいようである。

$N + \alpha$ (形容詞的修飾語句) + β (形容詞的修飾語句)... の構造の場合、 α が N、 β が α 内部の N を修飾する場合(I)と本来、 $N + \beta + \alpha$ となる β が右方移動し、 $N + \alpha + \beta$ となる場合(II)がある。(I)は読みやすいが、(II)は α が死角となり統語構造解析エラーが生じやすい。

(I) α が N、 β が α 内部の N を修飾する場合



(II) β が右方移動し N を修飾する場合



(06) It should come as no surprise, then, that Japanese readers should have no trouble accepting *the stylized characters* in manga, *with their small jaws, all but nonexistent noses, and famously enormous eyes*, as "Japanese." (愛知教育大, 06)

(それなら日本人読者がなんの問題もなく、漫画の型にはまったような小さな顎、ないに等し

い鼻、そしてよく知られた大きな目をもつ登場人物を“日本人”と受け止めてもなんら驚くべきことではない)

$N + \alpha$ (形容詞的修飾語句) + β (形容詞的修飾語句)の構造であり、形容詞的修飾語句として機能する with their small jaws...eyes が右方移動し、the stylized characters を後置修飾する形態となっている。

(07) An *analysis* of human brain tissue, for example, *conducted by Sandra Witelson and her colleagues at the Michael G. DeGroot School of Medicine at McMaster University*, revealed that women's nerve cells were 11 percent denser than men's in a region of the temporal cortex that is involved with language processing, comprehension, and memory. (早稲田大, 08)

(例えば、マックマスター大学のマイケル＝G. ドグロート医学学校で、サンドラ＝ウィテルソンと彼女の同僚が行った人の脳組織の分析で明らかにしたことは、言語処理、理解、記憶に関する側頭皮質の領域では、女性の神経細胞が男性よりも11%も密度が高いことである)

An analysis of..., conducted... の前置詞句(of...) と分詞句(conducted...) がともに形容詞的修飾語句として analysis を修飾する構造であるが、過去分詞 conducted を動詞の過去時制と混同する事例が見られる。なお、conducted... を分詞構文 being が任意削除された副詞的修飾語句と見なすこともできる。

(08) Consequently, many farmers did not plant them because of the need for constant care, and rather limited their diets to *vegetables* that could be stored or preserved, *such as pumpkins and beans*. (同志社大, 08)

(結果的に、多くの農家はこまめな手入れを必要とする野菜を植えず、食べる野菜はどちらか

といえばカボチャや豆類など、貯蔵や保存のできるものに限られていた)

A (M) such as B の構造であり、意味上、A (=vegetables) の具体説明が B (pumpkins and beans) である。vegetables such as... となる語句が分離した例である。関係代名詞 that に導かれる形容詞節があるため such as... の修飾先を見落とす事例が見られる。

- (09) However, many female officers say that, compared with their male counterparts, they are definitely more likely to experience *difficulties* when off duty, *like the incident that happened to Susan in the department store*. (京都産大, 09)
(しかし、多くの女性警官が言うには、男性警官と比較すると、彼女たちは、確かに勤務時間外るとき、デパートでスーザンに起こった出来事のような困った事柄を経験する可能性が高くなるそうである)

...difficulties like the incident... が分離した例である。when の後には they (=female officers) are が任意削除されたものと考えることができる。日本語でも主節の S と同一指示の従属節の S は明示されないのが一般的であるから、この形態は理解しやすいはずであるが英語では be 動詞まで削除されるため統語解析で戸惑うケースは多い。和訳する際は、従属節の S を明示せずに英文と同じ構造のまま訳出すれば自然な日本語になる。

- (10) Kathy was waiting for any little *changes* in his voice *that might suggest that he was not sure about what he was saying*. (神戸大, 08)
(キャッシュは、彼の声になんらかの小さな変化が起きて、ひょっとして話していることに確信がもてないことが示されるかもしれないと待ちかまえていた)

N (分離先行詞) + M① (前置詞句) + M② (関係詞

節) の構造であり、関係詞節が右方移動したものになっている。日本語に置換する場合、M① → M② → N でも M② → M① → N でもよいが context に即応した訳出を工夫しなければならない。comma がある場合は見分けやすいが、(10) のように comma がない場合は M① 内部の N を先行詞と見間違い、プロファイルしにくいようである。

- (11) But research and its reporting are also social acts that require you to think steadily about how your work relates to your readers, about the responsibility you have not just toward your subject and yourself, but toward them as well, especially when you believe that you have *something* to say *that is important enough to cause readers to change their lives by changing what and how they think*. (大阪大, 05)
(しかし、研究とその報告もまた社会的行為であり、それによって研究者は自らの仕事と論文を読む者がどうかかわっているのかについて、つまり自分の研究課題や自らに対してだけでなく論文を読む者に対しても同様にもっている責任について絶えず考えなければならない。特に自分の論文を読む者の考える内容や考え方が変わることによって彼らの人生まで変化させてしまうほど重要な言うべきことがあると、自らが信じている場合はなおさらである)

something that...to say の主格関係代名詞 that に導かれる形容詞節が右方移動した形態であり、構造解析エラーだけでなく、日本語に置換する過程でも誤読が見られる。say の目的語が that... ではなく、say の意味上の目的語が something that... であることに注意。

今回は大学入試をもとに形容詞的修飾語句の事例を挙げてみた。次回では、副詞的修飾語句の事例を挙げていきたいと思う。

(雲雀丘学園高等学校教諭)